

Special!

異なるジャンルを専門とする
教員による
スペシャル対談コンテンツ

ファッション という枠 を超えて。



服装学部
ファッションクリエイション学科

高村 是州 教授

東京学芸大学教育学部、桑沢デザイン研究所ドレスデザイン科卒業。出版社、広告代理店、アパレルメーカー等でファッションイラスト、デザイン、服飾評論を中心に活動。2007年より服装学部教員。近著は「ファッションスタイル・クロニクル」(グラフィックス社)

造形学部
建築・インテリア学科

横山 稔 教授

米国ニューヨークプラット大学大学院インテリアデザイン学科修了。米国カリフォルニア州Orange Coast College 名誉客員教授。国内外での教授職、実務経験や受賞歴多数。ファッションとの関わりも深く、第17回日本感性工学会大会ではファッションデザイナーのミキオサカベ氏とのデザインセッションを行った。対談時の衣装やアクセサリーも自身のデザイン。

「ファッション」と「インテリア」

ファッションとインテリアは密接な関係。
視野を広げれば、その接点が見えてくる。

デザインという共通項を持ちつつも、それぞれ異なるジャンルのように見える2つは、互いに深く影響し合っているという。その関係性から、将来に幅広く生かせるというデザイン思考の話まで、「デザイン」をキーワードに、高村教授と横山教授が語り合った。

ファッションもインテリアも自己と他者を繋ぐ重要なツール

高村：意外に知られていないのですが、実はファッションとインテリアは切っても切れないほど密接な関係にあります。というのは、服をデザインするときはその目的を明確にすることを求められ、たとえば、スーツならオフィス、パジャマなら寝室など、その着用背景を意識することが大切だからです。

横山：国内外のインテリア雑誌をめくるとファッション関連の記事が載っていますし、



ファッション雑誌にもインテリアの情報は欠かせません。このことから両者の結び付きは非常に深いことがわかりますよね。

高村：いわば自己と他者を区切るものと言えるのが「衣」と「住」。この2つを使って人は自己を表現し、他者はそれを受け入れて、お互いの関係が成立しています。だからこそ、こういう服を着ている人はこんなタイプ、こういう場所に住んでいる人はこんなタイプと、私たちは想像できるのではないのでしょうか。

横山：なるほど。インテリアの場合、面白いのは、空間が狭くなればなるほどファッションを意識せざるを得なくなることです。実は、以前『新建築』(日本の建築デザイン専門誌)で発表した自分で設計した約30㎡の事務所兼自宅という狭小空間に住んだことがあるのですが、室内の配色をモノトーンにしたら、インテリア空間を広く見せようと白と黒の服以外は着られなくなったのを覚えています。そういう意味では、究極のインテリアは「着るインテリア」と言えるかもしれませんね。

高村：ファッションは、インテリアに比べると視覚的で、より自己を表現しやすいもの

ですが、相互に影響し合っている部分は本当に大きいですね。

感性と理論の両方から学んで クリエイティビティを磨く

横山：先ほど高村先生から視覚という話が出ましたが、私が建築・インテリア学科で感性の導入教育として用いているのが、『五感のデザインワークブック』(彰国社)です。これは教育のシステムでグッドデザイン賞を受賞した私の著書で、授業では「音や香りから感じたイメージを絵に描く」「小説に出てくる空間をスケッチする」など五感を総動員したものづくりや表現に取り組んでいます。私がこうした学びにこだわる理由は、将来、AI(人工知能)などのテクノロジーが進化すればするほど五感を刺激するようなヒューマンなデザインが求められると思うからです。そこで学生時代から五感を鍛え、目に見えない大切な気配までもデザインする、その基礎を磨いてほしいと思っています。



高村：面白い学びですね。ファッション系でいえば、たとえば私が担当しているファッションデザイン画の授業。まず顔を大きく描くアニメのキャラクターと、顔を小さく手足を長く描く8頭身のファッション画を比較します。それらを通して、「2頭身のキャラクターにスカートを描いてもデザインがわかりにくいよね」と、ファッションデザイン画の基礎となる人体バランスの意味を教えています。学生に楽しいと思ってもらうことを入口に、実践へと繋げていき、その内容を深めていけるような工夫をしています。

横山：デザインには「感性」と「理論」と2つの領域があります。ファッションデザインの場合は感性に力点を置いているのですが、インテリアは半々かなと。この割合は芸術性を追求すると7対3、8対2など感性部分が上昇します。こうした感性と理論や機能のベクトルを行ったり来たりしながら、学んでいくのもインテリアの面白いところではないでしょうか。

高村：ファッションの世界にも、実用性のみに特化した服もあります。その一方で、パ

リコレなどコレクション作品が表しているのは「人間の美意識とはこんなに豊かなんだ」ということです。芸術性の高いものから日常生活に根ざしたものでデザインの世界は多様性に溢れていること。こうしたことも、ファッションを学問として学ぶことで身につけられると思います。

将来いろいろな分野に活用できる「デザイン思考」

横山：デザインを学ぶと、将来いろいろな分野にも応用が可能です。現在米国のスタンフォード大学では、デザインをビジネスなどの問題の解決に役立つ「Dスクール」という学科を設け、文系・理系の枠を超えて学生の人気を集めています。ところが、日本では未だにデザイン＝スタイリングと思い込んでいる人は多いのが現状です。実はデザインを通じて身につけた思考法や感性は、例えば営業職や事務職に就いても、企画立案をはじめさまざまな場面で生かせるものなのです。

高村：デザインと聞くと、美しく視覚化されたアウトプットだけに目が行くかもしれませんが、ただ、キャリアデザインという言葉もあって人生設計の意味で使われるように、デザインと人生は直結しているものではないでしょうか。ファッションでもインテリアでも、デザインを学ぶことで、ものづくりだけでなく人生をどう楽しく過ごすかなど、人間として生きる意味も実感できると思います。文化学園大学の学生には、そうした貴重な時間を過ごす中で、自分の人生をデザインでき

るようになってほしいと思っています。

個性的な学生が集う 本学ならではの学びの環境

横山：デザインを学ぶうえで知識やスキルだけでなく、五感を通したさまざまな経験を積んで感性を磨くことが大事。それが将来新しい発想やデザインを生み出す時のアイデアの引き出しになるに違いありません。その点、新宿にある本学は流行の発信地である原宿や渋谷に近く、授業の合間や放課後に気軽に寄り道して感性を磨くことができる恵まれた環境にあります。

高村：それはキャンパス内でも同じですね。例えば、学食に行くと、全く異なるジャンルのファッションに身を包んだ学生同士が仲良くランチを食べている。一見不思議な光景だけど、互いの多様性を認め合っている証ですよ。そうした「面白いなあ」と思える体験が日常的にあることで、一人ひとりのセンスも磨かれていくのではないのでしょうか。

横山：「いつも楽しそうだね!」とよく言われる私ですが、人生を楽しんでいけるメンタリティーは積み上げてきた多くの五感の経験によるものではないかと思っています。私の場合は、長年自分が好きなインテリアの仕事が続けてきたからでしょうね。「将来好きなことを仕事にしたい」という学生を全力で後押しする先生が、ここにはたくさんいますよ。ぜひここで自分だけの夢や希望にトライしてください。

Special!
ファッション
という枠
を超えて。



文化学園大学・短期大学部

服装学部 ファッションクリエイション学科 | ファッション社会学科 | 造形学部 デザイン・造形学科 | 繊維・インテリア学科 | 現代文化学部 国際文化・観光学科 | 国際ファッション文化学科 | 短期大学部 ファッション学科

文化学園大学 入試広報課 TEL 03-3299-2311

〒151-8523 東京都渋谷区代々木 3-22-1

「ここにしかない」がある。
<http://bwu.bunka.ac.jp/>

